

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：32101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370971

研究課題名(和文)「伝統野菜」と地域振興に関する人類学的研究

研究課題名(英文)An Anthropological Study on 'Dento-yasai' and Local Development

## 研究代表者

鈴木 晋介 (SUZUKI, Shinsuke)

茨城キリスト教大学・文学部・助教

研究者番号：30573175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1980年代後半以降日本各地で進行する「伝統野菜」復興の取組みをテーマに、現代社会に萌芽しつつある新たな食文化と地域振興の創造プロセスを人類学的なフィールドワークを通じて明らかにするものである。一連の研究を通じて、(1)各地の伝統野菜に関するデータベースの作成、(2)生活の場における人と野菜の多様な生きる在りように関する微細な民族誌的データ収集と記録の集成を行った。

研究成果の概要(英文)：This study provides a database and ethnographic records on 'Dento-yasai' movement in present day Japanese society. 'Dento-yasai' or 'traditional vegetable' is a title of local varieties which has been widely noticed as one of resources of local development since the late 1980s. Field researches revealed that on-going revival movement of Dento-yasai is not mere commodification of local varieties but has potential for empowering local community and re-activating its locality. Ethnography on Dento-yasai and re-activation of locality shows unique characteristics of creative processes of new locality in modern Japanese society.

研究分野：文化人類学

キーワード：地域振興 ローカリティ 文化人類学 民族誌 伝統野菜

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代後半の「京野菜」ブランド認定を端緒に、在来作物の再評価・プロデュースの動きが全国に拡大を続けている。本研究ではこれを「伝統野菜ムーブメント」と呼ぶ。同ムーブメントをめぐる、個別作物の品種特性の研究といった農学分野の研究や、ブランド化や商品開発をめぐる経営・農産物流通系の研究が進んでいるが、ムーブメント全体をひとつの社会現象として捉えその全体像を把握する試みならびに個々の取り組み現場の実態に関するエスノグラフィックな研究はなされていないという現状があった。また同ムーブメントはとくに地域振興の施策ともリンクするため、その実態調査とともにムーブメント自体の同時代的意義をめぐる考察が強く求められていたといえる。本研究はこうした環境のもとに開始されたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本各地で進行する伝統野菜の復興の取り組みに焦点を当て、データベース構築と人類学的エスノグラフィの作成を通じて、現代社会に萌芽しつつある新たな食文化と地域振興の創造プロセスを明らかにすることである。全体を通じて、現代の食文化と暮らしを再考するための基礎資料の集積と思考のパスpekティブを提示していくことが目指された。

## 3. 研究の方法

データベース構築とエスノグラフィ作成という二つの目的に照らし、次の方法によって研究を遂行した。

### (1) データベース構築

現在進行形のムーブメントを各種メディア(事典等の書籍、新聞記事、web)の情報を対象としてつばさに精査し、多項目にわたる情報整理を行いリスト化を図る。

### (2) エスノグラフィ作成

特定のフィールドを選定し、継続的なフィールドワーク(インタビュー調査を中心に史料収集までを含む)を通じて民族誌的データの集積を図り、エスノグラフィを作成する。

## 4. 研究成果

### (1) データベース構築

#### 全国の伝統野菜リスト作成

全国各地で伝統野菜というラベルの下に取り上げ直しの光を浴びている在来作物のリスト化を行った。主たるデータ項目は、「野菜名(よみがな)」、「主要産地」、「栽培歴(言い伝え等も含む)」、「当該野菜のブランド名」、「ブランド認定年月日」等である。本研究課題の終了した2017年3月現在のデータでは全763種の伝統野菜をリストアップした。

#### 各地の伝統野菜の選定基準リスト化

ムーブメントの諸主体(地方自治体、JA関係者、流通業者、農業生産者等)によって独

自に設定されているブランド認定基準について、能う限り網羅的な情報収集とそのリスト化を行った。

#### 主要全国紙の関連記事集計

ムーブメント拡大のインデックスともなるメディア情報の増減を把握すべく、主要全国紙3紙の「伝統野菜」関連記事掲載数の推移を、1980年代からはじめ本研究期間中も継続的に集計を行った。

### (2) エスノグラフィ作成

民族誌的資料収集のための短期フィールドワーク(関連イベントへの参加、アンケート調査、参与観察を含む)を2014年度計5回(東京都、新潟県、群馬県)、2015年度計7回(茨城県、新潟県、群馬県)実施した(2016年度はインタビューのテープ起こしをはじめとするデータ整理と論文執筆を中心とした)。この過程でとくに新潟県長岡市山古志地区、茨城県常陸太田市里川地区をメインフィールドに設定した。フィールドワークの成果は、本研究プロジェクトの専用ホームページを通じて随時発信するとともに、論文の形で公表を行った。

新潟県長岡市山古志地区の伝統野菜「かぐらなんばん」に関するフィールドワークに基づくエスノグラフィと人類学者ティム・インゴルド(Tim Ingold)のローカリティ論を交差させた本研究プロジェクトの考察の要点は大きく3点に整理できる。第一に在来作物に連鎖する非匿名的なひとのつながりの生成(スーパーマーケットに陳列される野菜に貼られた非匿名的な記号としての「生産者の顔写真」とは対照的なインデックス性(換喩的隣接性[鈴木 2013]を有したつながりの生成)第二に所謂F1品種とは異なる、「種を継いでいく営為」の有するローカリティ生成の側面(この点は、伝統野菜というものを、コモディティ化を前提としたある種のフィクショナルな枠組みと捉える視点[cf. 香坂・富吉 2015]では不可視化される「生きられる文化」[関根 2001]の水準である)第三に地域外住民も巻き込んでいくムーブメントが有するローカリティの賦活作用(ムーブメントは単なる商品化や表層的ないわば「お飾り」な地域活性の看板ではなく、地域外住民をさまざまな形で結び、それが地域の活力へと変換されていくという性質をもつ)である。これら三点は、ムーブメントの現場における内在的視点によってはじめて浮かびくるものであり、同時に現代社会における食文化のあり方の批判的再考(=ムーブメントの同時代的意義の問いかけ)の拠って立つべき、私たちによって「生きられた事実」ということができる。なお3年間の研究期間で蓄積した諸資料は随時断片的なエスノグラフィとして公表してきたが目下その集成を図っていることを付言する。

### (3) 各論的なその他の成果

上記論考の他に研究全体の序説的位置付けとして次の3点について整理・考察をまとめた。第一に、伝統野菜ムーブメントの全体像とその史的展開の概要の整理である。各地のブランド認定時期およびメディアによる取り上げ機会の増加等、諸データを勘案するに、1980年代後半の京都、つづく90年代初頭の石川(加賀野菜)をトップランナーとし、これに1990年代末頃に新潟(長岡野菜)等が続き、2000年代に入る頃よりムーブメントが全国に波及していったことが跡付けられた。

第二に本研究の支柱でもある「伝統野菜のエスノグラフィー」が有する、ムーブメントの同時代的意義の問いに果たす意義についての論考である。先述の通り、伝統野菜をめぐっては、農学や農産物流通等の研究で次第に蓄積が進んできたが、社会事象として同ムーブメントを対象化しその同時代的意義を考察する試みはほとんどなされていない。その考察のためにはいわば「現場に沈潜し」そこから事象を逆照射するようなエスノグラフィックな研究が不可欠なることを、香坂玲氏と富吉満之氏の論考[香坂・富吉 2015]とエリック・ホブズボウム(Eric Hobsbawm)らによる「伝統の創造(Invention of Tradition)」の議論[Hobsbawm and Ranger 1983]ならびに人類学者小田亮氏[小田 1997]や関根康正[関根 2001]らの「真正性の水準」や「生きられた文化概念とを交差させることで提示した(この作業はエスノグラフィーを執筆する傍らその執筆自体の学問的・社会的意義について明確に論じておくために行ったものである)。

第三に、伝統野菜ムーブメントを現代社会の文脈のなかに位置づける仕事として、2000年代前半(ムーブメントの全国的な波及の時期に対応する)になされた立川雅司氏による農業ないし農村をめぐる生産主義から「ポスト生産主義」への移行(1990年代)に関する議論[立川 2005]に遡及し、F1品種 生産主義、伝統野菜 ポスト生産主義 という入れ子状の対立項の構造的図式で捉える視角を提起した。この議論については試論的性格の強いものであるが、伝統野菜ムーブメントを「地方創生」や「食育の推進」といった政策的背景、「スローフード」や「グリーンツーリズム」といった都市生活者のライフスタイルの変容トレンド、さらには生物学的遺伝資源の多様性保護といったグローバルな問題意識の高まりや「和食」のユネスコ無形文化遺産登録といった出来事等、いずれもムーブメント拡大の背景ないし推進力を構成しているであろう広い時代的文脈のなかに捉え直していくという新たな課題に向けて橋頭堡を築く試みであったといえる。本研究プロジェクトの今後のひとつの展開方向を拓くことになっている。

(4) HPを通じて公表した成果について

研究成果の社会への還元を企図し、本研究プロジェクト開始初年度に専用ホームページを立ち上げ、フィールドレポートや各論的な論考を随時アップ、公表を行った。フィールドレポートとしては茨城県常陸太田市里川地区の伝統野菜「里川かぼちゃ」を題材に行ったフィールドワークの成果を「里川かぼちゃ」と紡がれるひとのネットワーク(前・後篇)として公表している(2016年)。

各論的な論考については、「伝統野菜ムーブメントの拡がり」(2017)においてムーブメントの全国波及の概要を整理した。「伝統野菜とはなにか? 定義をめぐる若干の省察」(2017)においては「定義」、「ブランド認定基準」、「在来作物の特徴」が混在した諸言説を整理するための指針を論じ、「伝統野菜認定の基準と「時間」に関するメモ」(2017年)では、各地の伝統野菜認定基準に表れる栽培歴の「古さ」をめぐる分類を元に、アンリ・ベルクソンの時間論を手掛かりとして伝統野菜認定に表れる時間感覚の亀裂をめぐって議論を行った。以上が、ホームページを通じて公表した研究成果である。

<引用文献>

小田 亮、「ポストモダン人類学の代価 ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」、『国立民族学博物館研究報告』21巻8号、1997、807-875頁。

香坂 玲・富吉 満之、「伝統野菜の今 地域の取り組み、地理的表示の保護と遺伝資源」、2015、アサヒビル・清水弘文堂書房。

鈴木 晋介、「つながりのジャーティヤ スリランカの民族とカースト」、2013、法蔵館。

関根 康正、「他者を自分のように語れないか? 異文化理解から他者了解へ」、『人類学的実践の再構築 ポストコロナル転回以後』(杉島 敬志編)、2001、世界思想社。

立川 雅司、「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」、『村落社会研究』(41)、2005、7-40頁。

Hobsbawm, E. and T. Ranger (eds.), 1983, *The Invention of Tradition*, Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

鈴木 晋介、「伝統野菜ムーブメントに関する人類学的研究 1 エスノグラフィーの意義および文脈としての「ポスト生産主義」への移行に関する試論」、『茨城キリスト教大学学術研究センター研究シリーズ』vol.3 No. 1、

査読なし、2017 1-38

〔図書〕(計2件)

関根 康正、鈴木 晋介(編)、明石書店、『南アジア系社会の周辺化された人々 下からの創発的生活実践』、2017、229

関根 康正(編)、風響社、『ストリート人類学』(鈴木 晋介、第14章「野菜とひとの紡ぐローカリティ 「伝統野菜のエスノグラフィ」のためのメモランダム」)、2017(印刷中)

〔その他〕

ホームページ等

<http://dentouyasai.jp/>

(ホームページ名:「伝統野菜」と地域振興に関する人類学的研究)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 晋介(SUZUKI, Shinsuke)

茨城キリスト教大学・文学部・助教

研究者番号: 30573175